

題目 「適応心理」は適応的か？—幸福度の規定因の国際比較—

氏名 松山遼太郎

指導教員 結城雅樹

多様な社会でうまく生活していくために多様な適応方略が存在する。その適応方略のうちどのようなものがふさわしいかは社会が持っている性質・特徴によって異なっている。そうした社会の違いを説明する要因の一つとして関係流動性という社会環境変数が挙げられる。自由に対人関係を選択することができる高関係流動社会では望ましい関係を保つことが、新たな対人関係を構築することが難しい低関係流動社会では集団内の調和を保つことが適応課題となっている。また、高関係流動社会では自尊心などの心理指標が高く、低関係流動社会では拒否回避などの心理指標が高いことが分かっている。だが、これらの心理指標が実際に社会における適応度に影響を与えているのかどうかは確認されていない。では、こうした関係流動性による文化差が確認されている心理指標と社会の特徴によって異なる適応課題とがうまく合致することで、社会に対する適応度は上昇するのだろうか。本研究では、自尊心をはじめとした関係流動性による文化差が確認されている心理指標と適応度としての幸福感との間に関連があるか、またその関連の強さが関係流動性によって変化するかどうか日米比較によって検証した。高関係流動社会で強い心理指標として自尊心、一般的信頼、親密性、自己開示、促進焦点を、低関係流動社会で強い心理指標として予防焦点、拒否回避を用い、適応度を測定するために人生満足尺度、対人関係満足関係尺度、協調的幸福感尺度を用いた。その結果、高関係流動社会で強いことが示されてきた心理指標は各適応度指標と正の相関があり、低関係流動社会で強いことが示されてきた心理指標は各適応度指標と負の相関があった。しかし、その相関の強さは日米で有意に違ってはいなかった。また、関係流動性による調整効果は予防焦点と人生満足尺度、予防焦点と協調的幸福感尺度の間でのみ確認できた。その効果は、関係流動性が高くなると予防焦点は幸福感尺度に対しより強い負の影響を与えるというものだった。この結果から、適応課題を達成しうる適応的な心理を持っても適応度は必ずしも上昇するというわけではないこと、高関係流動社会で予防焦点が強いと適応度は低下することが示唆された。ほとんどの心理指標において調整がみられなかったことから、逆にうまく社会に適応した結果として、心理の方が変化した可能性も考えられるのでさらなる研究が必要である。